

香取神社御由緒記

一、鎮座地

東京都江東区亀戸三丁目五十七番二十二号

一、亀戸の名称と変遷

亀戸は昔小さな島からなっており、初め亀島カメジマ又は亀津島カメツシマとも呼ばれ、島の形があたかも亀に似ているところからそのように名付けられた。現在この附近の土地には北に向島・牛島、南に大島、西に柳島等島にちなんだ名が多く、葦の海辺が次第に堆積して島となり、村落を形成して漁村となり、さらにはこれらの島々も四辺陸続きとなつて、亀島は亀村と称され、耕地と遷り変つていきました。

江戸名所図會にも

香取大神宮 此地も昔は泰平塚に等しく海にして一つの離島なり亀の浮べるに似たりとて、舊名を亀津島と唱へたりといふ云々と記されております。

後に臥龍梅庭内にある亀ヶ井と混同され、亀井戸と呼ぶようになったという説と亀津の津は戸の字義に同じであり、亀津を亀戸といった国語上の解釈との説がある。

一、御祭神

経津主神 相殿に武甕槌神・大己貴神

香取神社の御祭神経津主神は千早振る神代の昔畏くも皇祖の神勅を奉じ、鹿島大神と共に豊葦原瑞穂国（日本の国）の平定に手柄を立てられた威霊優れた国家鎮護の神として仰がれる我国武将の祖神であります。然も御本宮が神武天皇の御代に東国下総に鎮座されましたことは非常に意義のあることで、日本国の守護を固めた事になり、更に農業に深い関係があり、国土開発に多大の功績のあった産業の祖神でもあります。

故に大和朝廷におかれても殊に崇敬が篤く、中臣氏（後の藤原氏）は香取・鹿島両宮を氏神として忠誠を捧げ崇敬を尽されたのであります。

一、御由緒

当社の創立は天智天皇四年（六六五）、藤原鎌足公が東国下向の際、この亀の島に船を寄せられ、香取大神を勧請され太刀一振を納め、旅の安泰を祈り神徳を仰ぎ奉りましたのが創立の起因であります。

天慶の昔平将門が乱を起した時、追討使依藤太秀郷が当社に参籠し戦勝を祈願して戦いに臨んだところ、目出度く乱を平げたので神恩感謝の奉養として弓矢を奉納、勝矢と命名されました。現在でもこの古事により勝矢祭が五月五日に執り行なわれております。

以来益々土民の崇敬が篤く郷土の守護神というばかりでなく、御神徳が四方に及びましたので、葛飾神社香取太神宮と称え奉るに至りました。（当時の葛飾は下総国の大半を意味します。）

元禄十年検地の節は改めて杜寺の下附があり、徳川家の社寺帳にも載せられ古都古跡十二社の中にも数えられております。

一、御神徳

前にも述べたように大神は天より国土平定に当られ、日本建国の礎を築かれた大功神であり、歴代の天皇をはじめ源頼朝・徳川家康・秀忠・頼房等の武将の篤い崇敬を受け、又塚原卜伝や千葉周作をはじめ多くの剣豪の崇敬も篤く、現代でも武道修業の人々は大神を祖神と崇めております。

最近ではスポーツ振興の神として広く氏子内外を問わず参拝されております。その他交通安全・家内安全・厄除・開運祈願等御神徳の随に毎日このような趣旨による御祈願を受け付けて御奉仕いたしております。

一、御社殿

建武年間（二三三―四〇三七）香取伊賀守矢作連正基が始めて当社に奉仕し、香取神社初代神職となり、応安四年（三三七二）社殿再建、降って大永三年（一五二四）修造を営み、後寛永三年（一六二七）四月八日本殿改築に着手、同年九月二十四日竣工、文政年間（一八一八―一八二九）拝殿造営、明治五年十一月十六日村社に定